ジークフリート・レンツ「ホテルの一夜」試論
-希望と絶望のいくつかの可能性について-

メタデータ	言語: ja 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2023-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内,拓史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000142

明治大学教養論集　通巻570号
（2023・9）pp. 105–123

ジークフリート・レンツ「ホテルの一夜」試論
―― 希望と絶望のいくつかの可能性について ――

竹　内　拓　史

1

1957 年発表のジークフリート・レンツの初期短編集『嘲りの猟師（Jäger des Spotts）』に収められた「ホテルの一夜（Die Nacht im Hotel）」は，最後の一行で結末が明かされる鮮やかな一篇である。あらすじは以下のとおりである。

主人公の男シュヴァムは，ホテルの相部屋で偶然一夜を共にすることになった松葉杖を持つ見知らぬ男に，自分がこの町に来た理由を明かす。それは「かなり奇妙な理由」[注1)] で，踏切で電車にむかって手を振る息子に，電車から手を振り返すためというものである。息子は毎朝学校へ行くときに踏切で手を振るものの，誰にも手を振り返してもらえず，そのことに「絶望してしまう」[注2)]。その息子のためにシュヴァムはわざわざ電車に乗り，手を振り返してやるつもりなのだ。だがそれを聞いた見知らぬ男は，自分は妻を最初のお産の時に子どものせいで亡くしていて子どもが嫌いだし，あなたがやろうとしていることは「だますこと」[注3)] であり「ごまかし」[注4)] であると非難す

注 1）　Lenz, Siegfried: Die Nacht im Hotel. In: Jäger des Spotts. Geschichte aus dieser Zeit. München 1965, S. 134.
注 2）　Ebd., S. 135.
注 3）　Ebd., S. 136.
注 4）　Ebd.

る。シュヴァムは怒って布団をかぶって寝てしまうが，翌朝寝過ごしてしまい電車には間に合わず，がっかりして家に帰る。すると息子が嬉しそうに，「手を振り返してくれる人がいたよ」[注5)] と報告してくる。シュヴァムが思わず，その男は松葉杖で合図をしたのではないかと息子に尋ねると，果たして答えは「うん，ステッキでね」[注6)] であった。

ストーリーは以上であるが，分娩時に妻を亡くしたことが理由で子ども嫌いになっている男が，それでも主人公の代わりにその息子を喜ばせるために一肌脱ぐという結末は読者の心を打つ。だがこの物語は全部で 1000 語にも満たないことに加え，レンツは「感情移入することなく，客観的に，語り手として口出しすることなく，一見離れた態度で語り」[注7)]，心情描写がほとんどない[注8)]。ヴォルフガング・イーザーによれば，テクストは言葉相互のつながりに不確定な部分，「空所」を持つが，読者の意識内で，読者が自らの想

注 5）　Ebd.

注 6）　Ebd.

注 7）　Wegener, Hans: Siegfried Lenz: Die Nacht im Hotel.（Reclam, eBook）S. 5.

注 8）　ヘミングウェイとの類似が指摘されている（参照：山崎隆司「レンツ――掌編作家レンツの発展」（深見茂，栗林澄夫，平田達治編『ドイツ短編小説の変容』（1976 年，クヴェレ会）所収）326 頁以降，及び水内透『ジークフリート・レンツの世界』（1997 年，渓水社）3 頁以降）。「ホテルの一夜」は 1949 年に「ジークフリート・レンツによって書かれた初めての作品」（Wilhelm Johannes Schwarz: Der Erzähler Siegfried Lenz. Mit einem Beitrag: Das szenische Werk von Hans-Jürgen Greif. Bern/München 1974, S. 8.）であると考えられるが，レンツ自身も „Mein Vorbild Hemingway. Modell oder Provokation“ というエッセイで，自身の特に初期の作品においてヘミングウェイの影響を受けていることを認めている（Vgl. Lenz, Siegfried: Mein Vorbild Hemingway. Modell oder Provokation. In: Beziehungen. Ansichten und Bekenntnisse zur Literatur. München 1972, S. 37 ff.）。今回扱っている「ホテルの一夜」が収められている短編集の副題「現代の物語（Geschichten aus dieser Zeit）」もヘミングウェイの「我らの時代に（In Our Time）」の影響であるとの指摘もある（参照：水内透：上掲書，6 頁）。またドゥルツァークは，記者を経て作家になったという経歴についてもヘミングウェイとの類似を指摘している（Vgl. Durzak, Manfred: Die deutsche Kurzgeschichte der Gegenwart. Stuttgart 1980, S. 212 f.）。

像力によって「空所」を補填することで，作品は美的価値を持ちうるという[注9)]。この短編も「読者に空所の決定を委ねる」[注10)]ものであり，その典型的な例であろう。本稿では登場人物3人――主人公シュヴァムとその息子，および杖を持つ見知らぬ男――の各々の苦悩について考察することで物語の「空所」を埋めつつ，この物語が提示する絶望と希望についてのいくつかの解釈の可能性を提示したい。

2

まず主人公のシュヴァムがこの町にやってきた理由について考察してみよう。彼の息子は毎日踏切のところで電車に手を振るのに誰も手を振り返してくれないことに「絶望して」おり，それはシュヴァムが言うには「危険な状態にある」[注11)]ほどなので，自分が電車に乗って手を振りに来たという。だがいったいなぜそれだけのことに息子は「絶望」しているのか，そしてなぜその息子のために父親はわざわざ自分が電車に乗って手を振ろうとまで考えたのだろうか。少々不自然にも見えるこれらの点からまず考察してみたい。

この息子が毎日のように繰り返しているように，私たちは，まったくの見ず知らずの人であれ手を振ったり挨拶をしたりすれば，確かに程度の差はあれど，相手から同様の反応があることをわずかばかりでも期待するものである。その期待は，お互いにお互いの存在を認めているという単純な承認欲求であるとも言える。承認欲求の土台にあるのはそこに自分がいることを認め

注9）　参照：W・イーザー『行為としての読書』（轡田収訳）岩波現代選書，1982年，280頁以降。
注10）　Wegener, Hans: a. a. O., S. 5.
注11）　Lenz, Siegfried: Die Nacht im Hotel, S. 135.

てもらう「存在の承認」であると言われるが[注12]，私たちが，たとえわずかな時と場所を共有したに過ぎない名前も知らない他人であっても（例えば登山道ですれ違うだけの赤の他人であっても），挨拶をしてそれに返答があった時に多少なりとも気分が良くなるとすれば，それは承認欲求の基礎となる存在承認欲求が満たされていることが理由の一つと考えられる。とすれば，たとえ具体的に意識していないとしても，シュヴァムの息子は子どもらしい無垢さで，見知らぬ他人であっても互いの存在を認め合えるはずだと信じていると言える。

だが当然ながら現実はいつもそうとは限らない。それどころか私たちは，多くの時と場所を共有してすら，なおお互いを認め合えないことも珍しくない。とすれば，この子どもの絶望は，そのような現実世界への絶望であり，やがて否応なく彼も生きることになる将来の人間社会への絶望でもある。もちろん多くの場合私たちは，いつかはそのことを受け入れ，時には仕方ないと諦めて，生きていくことになる。だが父親は，「ガラスの心」[注13]を持つまだ幼い無垢な息子が「危険な状態にある」のを見て，彼がその現実を受け入れられず耐えられないと考え，一計を案じたと考えられる。

すでに大人のシュヴァムにすれば，無邪気に手を振り返してくれる人がいないということは不思議なことではないだろうから，彼の「計画」がその場

注12）よく知られているように，マズローの欲求五段階説では，「承認欲求」はその上から二番目となるが（参照：A. H. マズロー『人間性の心理学：モチベーションとパーソナリティ（改訂新版）』（小口忠彦訳）産業能率大学出版部，1987，56頁以降），「承認」をさらに複数の段階に分けることがある。例えば「存在の承認」と「行為の承認」の二段階に分けたり（参照：山竹伸二『人はなぜ「認められたい」のか――承認不安を生きる知恵』筑摩新書，2021年，29頁以降），「存在の承認」，「プロセスの承認」，「貢献の承認」，「結果の承認」，「パーソナリティの承認」の五段階に分ける例があるが（参照：志田貴史『ESで離職率1%を可能にする人繰りの技術』太陽出版，2017年，58頁），「存在の承認」をそれらの最も基礎的な土台の部分とすることは共通している。またその「存在の承認」の基本的なものとして，挨拶がしばしばあげられる。

注13）Lenz, Siegfried: a. a. O., S. 135.

しのぎに過ぎないことは承知のうえでのことで，それでも息子の一時の心の安寧を願ってのことだったはずだ。だから見知らぬ男の，それは「だますこと」であり「ごまかし」であるとの指摘に彼が「憤慨」[注14] するのは，無垢な思いを持った子どもを大人がだまして救おうという矛盾に加え，どうせ一時しのぎに過ぎないという自分も十分承知していながら考えないようにしていた事実に関して，いわば図星をつかれたからであろう。シュヴァムが見ないようにしていた事実を見知らぬ男によって指摘されたということは，見知らぬ男のその言葉に対してシュヴァムがとった行動が「布団を頭からかぶる」[注15] という，いわば真実から目を背ける行動であることからも推察される。

だが，真実から目を背けるというシュヴァムの行動からは，この父子の行動に関して他の解釈の可能性が連想される。そもそも息子が「絶望」している原因は，本当に手を振り返してもらえないことにあるのだろうか。シュヴァムは息子の様子を次のように説明する。

> それから（踏切で乗客に向かって合図をした後）息子は学校に行きます。で，家に帰ってくると，気持ちが乱れてぼんやりしてるんです。時には泣きわめくこともあります。宿題なんてできる状態じゃないんです。遊びたがらないし，話もしたがらない。もう何ヶ月もそんな状態です，毎日です。息子はだめになっちゃいそうなんです。[注16]

この説明によると，息子が「気持ちが乱れてぼんやりしてる」のも，「泣きわめく」のも，さらには「宿題なんてできる状態じゃない」のも，「遊びたがらないし，話もしたがらない」のも，彼が学校から「家に帰ってくると」起きている。しかもそれは何ヶ月にも渡って毎日のように続いていると

注 14）　Ebd., S. 136.
注 15）　Ebd.
注 16）　Ebd., S. 135. 括弧内は筆者による。

いう。毎日学校から帰ってくるとこのような様子であることからは，踏切での出来事よりも，むしろ彼が学校で何らかの問題を抱えていることを疑うべきだろう。しかし息子は親には直接そのことを言えないでいる。しかもシュヴァムはこの発言の直前の説明で，息子は「影が当たっただけでもびくっとしてしまう」[注17)] とまで言っている。「影が当たっただけでも，びくっとしてしまう」というのは，誰かが自分のそばに寄ってくるだけで怯えるということであり，尋常なことではない。このことからも，やはり学校で他の人とよほどのことがあったと考えるべきだろう。学校が原因であれば他の生徒か教師との関係が原因として考えられるが，彼が放課後も「遊びたがらない」ということからは，彼が怯えている相手が級友であることが強く推察される。

しかし息子はそのことを親に言うことができない。学校でいじめられている子どもが，そのことを家族に言えないということは珍しいことではない[注18)]。だがこの息子は，直接は言えないが，しかしもう十分「合図」を出している。誰も自分に「合図」を返してくれないという彼の話は，実は親に対する彼なりの「合図」であると解釈できる。シュヴァムが言うには，「息子はいつもひとりで学校に行っている」[注19)] ので，そもそもこの話自体が息子による作り話の可能性すらある。

注17）　Ebd.

注18）　参照：太田肇『承認欲求の呪縛』新潮社，2019年，93-94頁。それ以外にも，一例でしかないが，世界的ジャグラーのちゃんへ.は，在日朝鮮人として小学校でいじめられ過酷な暴力を受けたが，母親にばれたくない，悲しませたくないと学校に通い続けたという。参照：安田菜津紀「あなたのルーツを教えて下さい：ルーツ探しで見つけた答えは「自分を表すものは“ひとつ”でなくていい」（インターネットサイト「論座」より https://webronza.asahi.com/politics/articles/2020052400010.html?returl=https://webronza.asahi.com/politics/articles/2020052400010.html&code=101WRA（2023年6月12日閲覧））また，いじめられていることを周りの人に言えないことは，承認欲求と関連しているとの指摘もある（参照：太田肇，上掲書，93-94頁）。とすれば，ここにもシュヴァムの息子の満たされない承認欲求の影響が見てとれると言える。

注19）　Lenz, Siegfried: a. a. O., S. 135.

シュヴァムは上述のように，息子が「家に帰ってくると」息子の調子が悪くなることを見知らぬ男に明言しており，息子の不調の原因が学校にあることに気がついていてもおかしくないが，そのことに目をつぶっている（真実から目を背けている）のか，本当に気がついていないのか，少なくとも息子が「話をしたがらない」という彼の言葉からは，そのことについて息子とちゃんと話している節はない。それどころ「話をしたがらない」という言葉からは，息子とちゃんと話せない原因が，息子の側にあるかのような言い分にも聞こえ，自ら積極的に息子と向き合い対話をしていくという意思が感じられない[注20)]。

シュヴァムについては「家族思いの，責任感溢れた父親」[注21)]という評もあるが，以上のことからは，そもそも列車から手を振ろうという考え自体が問題の所在を見誤った対応であるし，それどころかシュヴァムは意識的にか無意識的にか，息子の本来の問題を無視している可能性が高いと言える。

3

息子の絶望についての上述のようないくつかの可能性をふまえたうえで，見知らぬ男が言う「ごまかし」や「だますこと」の意味についても考察してみよう。

見知らぬ男が言う「ごまかし」や「だますこと」という言葉は，一見すると，偶然を装ったり他人を装ったりするというシュヴァムが息子に対して行おうとしていることを指していると考えられる。またシュヴァムがその言葉に憤慨したのは，上述のように，無垢な子どもをだまして救おうとする矛盾

注20）　宮坂道夫は病を抱えている人のケアについて，「対話や承認それ自体がケアになるという可能性」（宮坂道夫『対話と承認のケア：ナラティブが生み出す世界』医学書院，2020年，2頁）について述べているが，だとすればシュヴァムの息子はそのどちらも欠けている状態にあると言えるだろう。

注21）　水内透：上掲書，25頁。

を指摘されたことや，息子の「ガラスの心」を守るために仕方なくごまかしをしていることを理解してもらえないことへの反応と考えられる。

だがこれから見るように，初産の際に妻を亡くしたこの男は，そもそも子どもを単純に「無垢」な存在とは見ておらず，無垢な子どもを大人が「だますこと」への非倫理性を非難しているだけではない可能性が考えられる。

下記の引用のように，シュヴァムが自分の計画を話すと，男は唐突に「自分には子どもなんてどうでもいい」と言い，それどころか続けて「子どもが嫌いなんです。避けてます」とまで言う。その理由は妻を最初のお産の時に亡くしたからであることが直後に男によって語られるが，興味深いのは，以下に引用するように，この時に男が使う「子ども」を表す単語がすべて複数形になっていることである。

> „Mich“ sagte der Fremde, „gehen Kindern nichts an. Ich hasse sie und weiche ihnen aus, denn ihretwegen habe ich – wenn man’s genau nimmt – meine Frau verloren. Sie starb bei der ersten Geburt.“ [注22)]

> 「自分には」と見知らぬ男は言った。「子どもなんてどうでもいいんですよ。子どもが嫌いなんです。避けてます。子どものせいで私は，結局のところ，妻を失ったんですから。最初のお産の時に死んだんですよ」

妻が死んだ時に子どもまで亡くなったのかについて男は明言しないが，わざわざ「最初のお産の時に」と強調していることや，「子どもなんてどうでもいい」とか「子どもが嫌い」と語っていることから，彼には子どもがいないことが強く示唆されている[注23)]。その際彼は子どもが嫌いな理由として，

注22）　Lenz, Siegfried: a. a. O., S. 135 f.

注23）　ハンス・ヴェゲナーも，見知らぬ男の子どもは死んだと考えられると書いている（Vgl. Wegener, Hans: a. a. O., S. 4.）

「子どものせいで（ihretwegen）」妻を亡くしたからと言う。生まれてくるはずの子どものせいで妻が亡くなったのであれば，「子ども」を単数形で表現しそうなものであるが，ここも含めて「子ども」を表す言葉はすべて複数形で語られている。このことからは，この見知らぬ男は単に自分の妻が死ぬ原因となった子どもだけが憎いのではなく，もはや子どもという存在そのものが憎くて仕方がないことが推察される[注24)]。

また，この台詞はシュヴァムが純真な子どもの心を守るために電車に乗って手を振る計画を話した直後の唐突とも言えるタイミングで出てくる。ここでは純真な子どもの心を守ろうとする主人公と，子どものせいで妻を亡くした男という対比が見て取れる。二人にとって子どもという存在は異なる意味を持ち，上述のようにシュヴァムにとって純真無垢な子どもも，見知らぬ男にとっては自分の人生に決定的な害をなす存在なのである。

とすれば，男の言う「ごまかし」は，単に無垢な子どもを大人がだますことへの非難だけでなく，既に述べたように，そこに含まれる矛盾や，どうせそれは一時しのぎに過ぎないということ，さらには問題の本質をそもそもシュヴァムが見誤っているどころか見ないようにしているということを指している可能性も考えられる。この場合，シュヴァムが「ごまかし」たり「だまし」たりする対象は息子ではなく，事実を見ようとしないシュヴァム自身ということになる。また，そもそも男にとっては，シュヴァムが持つような一面的でステレオタイプな純真無垢な子ども像そのものが欺瞞であり「ごまかし」であるとも言える。

この指摘に対するシュヴァムの「布団を頭からかぶる」という行動は，他者からの批判に対する極めて子どもっぽい反応だが，現実を直視しない彼の心の弱さの現れと理解することもできるだろう。そう考えると，シュヴァムが息子を救うための大事な日に寝坊してしまったことも理解できる。という

注24）　複数形になっていることの意味については，岡山大学の Anette Schilling 先生から多くの示唆をいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

のも，もし列車から息子に手を振ったなら，実はこんなことでは問題は解決しないどころか，学校や家庭に問題があるということをシュヴァムは直視しなければならなくなる。彼はそのことを受け入れられず，無意識的に寝過ごしてしまったという可能性も考えられる。

4

しかしではなぜ男はわざわざシュヴァムに行き先を聞いたうえで電車に乗り，子どもに手を振ったのだろうか。ここでの疑問はさしあたって二つある。一つは子ども嫌いであり，列車から子どもに合図を送ることについて「ごまかし」や「だますこと」とまで言った彼が，なぜ自らその行動をとったのかということであり，もう一つは自分で手を振るくらいならなぜシュヴァムを起こさなかったのかということだ。

その点を考察するためには，見知らぬ男がこの町にいる理由を考える必要がある。この小説ではシュヴァムが町に来た理由は雄弁に語られるが，見知らぬ男がこの町に来た理由は一切語られない。彼について分かることは，妻を最初のお産の時に亡くしたということと，松葉杖をついているということくらいである。前者については上で考察したが，松葉杖についてはどうだろうか。

シュヴァムの息子は，小説の最後でこの男の持つものを「ステッキ(Stock)」[注25)]と言うが，見知らぬ男自身は自分の持っているものを「松葉杖(Krücke)」[注26)]と言っており，男の足が不自由であることが分かる。この小説が書かれたのは1949年だが，ホテルで相部屋に通されるというのは戦後すぐの時代であれば考えられることであり，おそらく小説の舞台もそれくら

注25）　Lenz, Siegfried: a. a. O., S. 136.
注26）　Ebd., S. 134.

いであろう[注27)]。第二次世界大戦に従軍したという作者レンツの経歴を考えれば，この男が松葉杖をついているのは，戦争で負傷しその後遺症が未だ残っているからという可能性は考えられていいだろう[注28)]。もしかしてそのことについてこの見知らぬ男は戦後長らく不遇を託ってきたかもしれない。戦後レンツはハンブルクに住んでいたが[注29)]，敗戦後のドイツで傷痍軍人の姿を見ることは大都市であれば，ごく普通のことだっただろう。彼らは国家に奉仕した「英雄」であり[注30)]，公的支援や医療の発達，義肢などの発展に

注27）　Vgl. Wegener, Hans: a. a. O., S. 2.

注28）　Vgl. ebd. また，レンツは自身の半生を描いた „Ich zum Beispiel. Kennzeichen eines Jahresgang“ で従軍中のことを思い出し，「損壊した身体の中で，涙を流す子供たちの中で，そして沈没した船の中で，自分自身と自分の作品に出会うことができた」と書いている（Vgl. Lenz, Siegfried: Ich zum Beispiel. Kennzeichen eines Jahresgang. In: Beziehungen. Ansichten und Bekenntnisse zur Literatur. S. 25.）。さらに英軍の捕虜となり除隊委員の通訳をしていた時のことを思い出し，除隊を申請し来る人々を描写して「彼らは松葉杖をついたり，看護婦の腕につかまって来るのだった」と，見知らぬ男が使っているものと同じ「松葉杖（Krücke）」という単語を使っている（Vgl. Lenz, Siegfried: a. a. O., S. 27.）。また自身が影響を受けたことを明言しているヘミングウェイの特徴について述べるとき，「この世界でヘミングウェイが見いだし，読者に提示した真理は，「戦争の世界」の真理だった」（Vgl. Lenz, Siegfried: Mein Vorbild Hemingway. Modell oder Provokation. S. 38.）「特にヘミングウェイの二つの洞察が，私自身が探求する際に何度も確認され，基本的な機知を理解する助けとなった。それは人間のあらゆる争いは戦争のルールに規定されているという経験であり，人を見定めるにはほんの一瞬あれば十分であるという見解だった」（Lenz, Siegfried: a. a. O., S. 39.）等々と，しばしば「戦争」がキーワードとして出てくる。

注29）　Vgl. Lenz, Siegfried: Ich zum Beispiel. Kennzeichen eines Jahresgang. S. 28. u. S. 31.

注30）　上記の „Ich zum Beispiel. Kennzeichen eines Jahresgang“ で，入隊時の自身を思い返し，「英雄見習い（Heldenlehrling）」と皮肉を込めて書いている（Lenz, Siegfried: a. a. O., S. 23.）。それ以外にも「ヒロイズムは広告として機能していた，それは戦争の広告であり，私たちはその説得的な効果に屈することになるのだった」（Lenz, Siegfried: a. a. O., S. 16.），「前線では死闘に勝利していたがそれは見せかけのもので，ますます特報や栄光，英雄の歌が頻繁に聞かれるようになった」（Lenz, Siegfried: a. a. O., S. 20.）など「英雄」という言葉はたびたび否定的に用いられている。

寄与した一方で，差別の対象となり，貧困に喘いだ者も多かった[注31)]。また特に第二次世界大戦期の戦争障害者については，「過去の克服」の議論に押しやられ，再統一後まで関心を持たれることはなかった[注32)]。この小説の見知らぬ男は年齢も経歴も不詳で，傷痍軍人であるとの情報もこの「松葉杖」以外からは読み取れない。だが上述のようないくつかの理由から推測されるように，彼が傷痍軍人として差別され職も無く貧困に窮し，さらに妻と子どもを不幸にも亡くしているとしたら，その絶望はいかばかりだろうか。

さらに彼はこの短い小説中で唐突に複数回「自殺」という言葉を口にする。一度目は，シュヴァムがこの町に来た理由を語ろうとしたときに，「あなたはこの町で自殺するつもりなのですか」[注33)]と突然言ってシュヴァムを困惑させ，二度目はシュヴァムが息子のことを話しているときに，「じゃぁ，なんで息子さんは自殺しないんです」[注34)]と言う。どちらも「自殺」という言葉は前後の脈絡無く出てきており，そのことは男が「自殺」という考えにとらわれていることを強く示唆する。「松葉杖」から想像される彼の境遇とこれらの発言から，彼が「自殺」という考えに取り憑かれていたとする解釈は，それほど無理はない。

それどころか，彼はすでに自殺を試みていて死にきれなかった可能性すらある。というのも，彼はシュヴァムがこの部屋に入るときに部屋の電気をつけないように「強い声で」[注35)]言っている。「強い声」という描写やその後シュヴァムと会話を続けている様子からは，シュヴァムが部屋に来たときにこの男がまだ起きていたことが推察され，明かりをつけないよう要求した理由は，寝たいからではないと考えられる。であれば，部屋を暗いままにして

注31）　参照：北村陽子『戦争障害者の社会史　20世紀ドイツの経験と福祉国家』名古屋大学出版会，2021年，2-5頁。
注32）　上掲書，7頁。
注33）　Lenz, Siegfried: Die Nacht im Hotel, S. 134.
注34）　Ebd., S. 135.
注35）　Ebd., S. 134.

おくよう求めたのは，自身の姿を見られたくなかったからという可能性が考えられる[注36)]。もしかして彼は自殺未遂や自傷のため不自然なほどの怪我をしており，その姿を他人に見られたくなかったのではないだろうか。これも「強い声で」部屋を暗いままにしておくよう要求したことからの連想でしかないが，少なくともこの男が「自殺」という考えにとらわれているという可能性は十分考えられていいだろう。

また，この見知らぬ男はシュヴァムの代わりにクルツバッハ行きの電車に乗り子どもに合図を送ったが，もともとその町に行く予定があったのでなければ，彼はわざわざそこに行ったことになる。これは，彼にはホテルのある町で特に用事があったわけでないことを示しており，そのことは彼がこの町で自殺をしようとしていたという可能性と矛盾しない。

であれば，一見するとこの小説は，世間に絶望する息子とその子を救うために悩む父親を，子ども嫌いの赤の他人が助けてやるという話で，この見知らぬ男はあくまで通りすがりの男であるように思えるのだが，実はこの小説内で最も苦しみ，人生や世の中に絶望しているのは，息子でもましてやシュヴァムでもなく，この見知らぬ男ということになる。レンツは上記のエッセイ „Mein Vorbild Hemingway“ で，「止むことのない自問自答の過程で，私は「墜落する」人間，転げ落ち，敗れ去る人間について明らかにしようとした」[注37)]と書いているが，子どもと妻を亡くし，傷痍軍人として戦後差別を受け，さらには自殺未遂を繰り返しているかもしれないこの男は，なるほど詳細は不明だが，もしそうだとすればレンツが描こうとした人物像とぴったり合う。

注36）　ヴェゲナーは，戦争であまりに醜くなってしまった自身の姿でシュヴァムを怖がらせたくなかったからと推測している（Vgl. Wegener Hans: a. a. O., S. 3.）。

注37）　Lenz, Siegfried: Mein Vorbild Hemingway. Modell oder Provokation. S. 40.

5

その可能性をふまえつつ，ではなぜ彼は子どもを嫌っていることを明言しながら（しかもその理由は十分なものである），わざわざ電車に乗ってシュヴァムの息子に合図を送ったのだろうか。しかも彼は意図的にシュヴァムを起こさず，自分でシュヴァムの息子に手を振っており，そこには強い意思が感じられる。彼が自殺をするつもりでこの町に来ていたと前提すると，なぜ彼が合図を送ったのかということは，彼がではこの小説の後自殺するのかしないのかと併せて考えられていいだろう。というのも，彼がわざわざホテルに泊まってこの町に滞在していることを考えれば，彼はこの町で自殺をしようと思っていたと考えられる。だが，男は少なくとも翌日は自殺以外のやるべき使命ができ，結果として列車に乗りその自殺しようとした町から出て行くことになった。つまり彼はシュヴァムと出会いその息子の話を聞き息子に合図を送ることで，少なくともとりあえずのところは，自殺をやめたと考えられる。

もちろん男がシュヴァムの行為を「ごまかし」「だますこと」などと言っていることから，男が父親であるシュヴァムを，その「ごまかし」に加担させないようにしたと考えることもできる。その場合は，例えばどうせ自殺する自分であれば，それくらいの「ごまかし」を代わりにしてやってもいいだろうという気持ちがあったと考えることもできるだろう。するとやはり彼は，その後自殺するだろうと想像できる。いやそれとも，シュヴァムの息子に成長することのないまま死んでしまった自分の子どもを重ね合わせ，一時的にではあれその子を救ってやれたことを想像し，絶望にとらわれていた自分の人生に何らかの充足感や生きていくための希望を見いだしただろうか。

以上のように，彼が自殺したかも含めて，この小説に見知らぬ男のその後は描かれておらず，当然彼のその後についての解釈の可能性はいくつもあり，推測するしかない。この掌編小説は，シュヴァム父子ではなくむしろ名

前も与えられていないこの見知らぬ男のその後を考えることで，ちょっとしたハッピーエンドの「閉じた物語」から，「開かれた物語」になると言える[注38)]。だがこの試論はあえて，この小説の最後の一文とともに，見知らぬ男のその後の可能性についてさらに考察することで終わりにしたい。

小説は，寝過ごして列車から息子に手を振ることができず「打ちひしがれ，がっかりして家に着いた」[注39)] シュヴァムと「幸せそうに，喜びで我を忘れ」[注40)] た息子の短い会話で終わる。

「誰かが合図してくれたんだ。ずっと長いこと合図してくれたんだよ」
「松葉杖でか？」
「そう，ステッキでね。その男の人最後にはステッキにハンカチをつけて，ずっと窓から出してくれてたんだ。もう見えなくなるまでね」[注41)]

息子に合図をした男が，ホテルで同室だった男かは確定はできないが，そのことを強く示唆するエンディングは，一読すると感動的なラストと言える。だが前述のように，この男がまさに今自殺しようとしていた男であると前提すると，この男の行く末をどう考えるかは物語の結末と印象を大きく変えうる。

彼が「ずっと」「もう見えなくなるまで」子どもに合図を送ったという表現からは，男の何らかの強い想いが見て取れる。ステッキで合図をしていたというのだから，松葉杖をずっと振っていたのだろう。手を振るという行動は，様々な意味を持ちうるが，例えばこの試論の前半で述べたように，この

注38）「閉じた物語」と「開かれた物語」については以下を参照：Klotz, Volker: Geschlossene und offene Form im Drama, München 1960. もちろんこれは劇について書かれたものであるが，小説に応用することもできるだろう。
注39）Lenz, Siegfried: Die Nacht im Hotel, S. 136.
注40）Ebd.
注41）Ebd.

息子が他者とは分かり合えない世界で今後否応なく生きていくことになることをふまえれば，この男自身も辛酸をなめた理不尽で絶望的な世界でこれからまさに生きていくことになる子どもへのエールの行動と解釈することができるだろう。

また，そもそも父親のシュヴァムが息子に合図を送りに来たのは，どうせ誰も振ってくれないだろうという前提があるからであり，ここには所詮他人同士は分かり合えないし，この世界はそんなやさしい世界ではないという思いがある。だが見知らぬ男のこの行動は，息子が望んだような形での他者間の心の交流ではないかもしれないが，しかしホテルの相部屋でたまたま一晩をともにしただけの「見知らぬ」者同士でも分かり合える，いたわり合えるということを示したことになる。それは，もしかして戦争で障害を負い差別されてきたかもしれない「見知らぬ男」にとっても，この世界に対する一縷の望みであり，ずっと窓から手を振り続けた彼の姿は，彼自身も欺瞞や絶望に満ちたこの世界でもう一度生きていこうという決意表明とも解釈できる。

しかも彼が合図を送っていたのは松葉杖であり，それで合図を送っていたということは，つまり彼はその時文字通り自立していたと考えられる。それは，物語中最も救いがなく今にも自殺しそうなほど絶望していた男が，偶然の出会いをきっかけに，一時的ではあれ自分の足で再び立つこと，つまり立ち直ることを暗示しており，ハッピーエンドと見ることができる。

そもそも彼がなぜシュヴァムを起こさなかったのかも，この文脈で考えられる。それは彼自身，心の奥底ではこの町を出て行く理由，つまり自殺を思いとどまる理由を探していたからではないだろうか[注42)]。自殺をしにやって来たのにすぐに実行せずにホテルに泊まるという行動も，彼の迷いを示して

注42）　本稿で提示した，見知らぬ男は自殺をするつもりだったがシュヴァムの息子を救いに町を出て行くことで自殺を思いとどまったという解釈や，シュヴァムを欺瞞に加担させないために自ら手を振りに行ったという解釈は，当然すでにどこかに指摘されていてしかるべきものだが，少なくともこの拙稿を完成させるまでに筆者は論文や本でそのような解釈を見つけられなかった。

いると解釈できるし，シュヴァムをわざわざ起こさずに部屋を出て行くという行動には，彼の明らかな意図や意思が感じられる。それは手を振りに列車に乗るためにというよりは，自殺しようとしたこの町を出て行くという意思だったのではないだろうか。そのことは，実は彼はまだ生きていたいと願っていたことを意味することに他ならず，この偶然の出会いにより絶望の淵から本当に救われたのはこの見知らぬ男であったということになる。レンツが「墜落する人間，転げ落ち，敗れ去る人間」の像を明らかにしたいと書いたのは上述のとおりだが，彼はその後に「しかし私は同様に，避けがたい運命への抵抗の瞬間にも興味があったのだ」[注43)] と書いている。戦争で障害を負い差別されたのみならず，産褥で妻と子どもを亡くし自殺するほど絶望していた男が，自分が救った子どもにいつまでも手を振り生きる力を取り戻す様は，まさにレンツが描きたかった「人間の避けがたい運命への抵抗の瞬間」であろう。

もちろん手を振るという行為は，当然ながら別れをも意味する。また棒にハンカチをつけて合図を送るという姿からは，降参をイメージすることもできる。であればその行動は，上述のような子どもへのエールとともに，自身はその世界で生きることは諦め，決別する＝自殺する改めての決意表明とも解釈しうる。

以上のように，見知らぬ男が自殺を思いとどまったのか，それともやはり自殺するのかは，松葉杖にハンカチをつけてずっと窓から合図をし続けたという男の最後の行動をどう解釈するかとも深く関連しており，もちろん決定することはできない。だがたとえ後者であったとしても，彼がこの作品中では自殺をしていないことは確かである。であれば，たとえ一時しのぎに過ぎなかったとしても，この作品はとりあえずは誰もが幸せになるハッピーエンドの物語と言っていいのかもしれない。息子は初めて列車から手を振ってもらい「幸せそうに，喜びに我を忘れ」ているし，父親は自らの失敗にもかか

注 43）　Lenz, Siegfried: Mein Vorbild Hemingway. Modell oder Provokation. S. 40.

わらず息子が元気になっている。そして自殺するほどの絶望にとらわれていた見知らぬ男は，町を出ていく＝自殺をやめるきっかけを得た。

だが一方で，この作品がただのハッピーエンドの物語であると言えないのは，各々の問題が本質的には，どれも解決されていないからでもある。息子は近いうちにこの世の厳しい現実を知るだろうし，また彼の問題が実は学校や家庭にあるのなら，その問題は解決されず放置されたままである。父は息子の本当の問題は見て見ぬふりであったが，今回の見知らぬ男の行動により，とりあえずは息子の精神状態が回復したことで，今後も息子の問題には目をつぶり続けるだろう。見知らぬ男については，例えばハンス・ヴェゲナーは「見知らぬ男の子どもに対する憎しみ，内なる恨みは解消された」[注44)] と主張するが，自殺するほどの絶望にとらわれていた男は，はたして今回の出来事でその絶望が消えたとはとても思えない。死んだ妻子や心身の状態など，彼の境遇が変わることはないのであるから。

だがそれこそが私たちの多くの人生の縮図であろう。カフカやトーマス・マンなど現代ドイツの多くの作家に影響を与えたショーペンハウアーが[注45)]，「たいていの人は，最後に人生を振り返った時に，一時しのぎの連続で一生涯を生きたことを発見する」[注46)] と言っているように，確かに私たちは多くの場合，自身とその周りの問題をすべて解決することなどできないし，そうであれば一時しのぎの小さなハッピーエンドに小さな幸せを感じ，場合によっては自身の抱える本当の問題をそれにより覆い隠す。なぜなら，

注44）　Wegener, Hans: a. a. O., S. 5.

注45）　トーマス・マンは「ショーペンハウアー」というエッセイを書いており（Mann, Thomas: Schopenhauer. In: Gesammelte Werke. Frankfurt am Main 1974, Bd. 9, S. 528-580.），カフカは「ショーペンハウアーは言語の芸術家です。そこから彼の思想はわき出てくるのです。言葉というその一事をもって，彼は絶対に読まれねばならないのです」と述べている（Janouch, Gustav: Gespräche mit Kafka. Hrsg. von Gerd Haffmans. 3. Auflage. Zürich 1981, S. 257.）。

注46）　Schopenhauer, Arthur: Parerga und Paralipomena: kleine philosophische Schriften. 2 Bde. Berlin 1851, Bd. 2, S. 243.

そうしてのみ，見知らぬ男がとりあえずは生きのびたように，この絶望に満ち満ちた世界を私たちはとりあえずは生きのびていけるからである。であれば，それをわたしたちは，「絶望」ではなく「希望」と呼んでもいいのかもしれない。

（たけうち・たくし　経営学部准教授）